

本文中でも何度かふれましたが、日本では、「英文法」の対極に「英会話」という概念があります。この「英会話 対 英文法」あるいは「英会話 対 英語」という構図は、日本での外国語教育に関わる多くの議論の中心を占める問題となっています。

ですから、当然のことながら、英文法について論じれば、この問題を避けてとおることはできません。このテーマについての私の意見を述べて、本書の締めくくりとしたいと思います。

### ❖英語勝ち組の法則

日本の教育制度の枠内であれ、枠外（例えば、独学するか英語学校に通うなどして）であれ、英語上達に成功して、満足できる水準にまで到達できた人たちは、おそらく「英会話」などと呼ばれるものは存在しないということを熟知していると思います。

そもそも、「英語」という教科（中学や高校など、正式な教育の枠内で行われる）があり、他にも「英会話」（「英語」に対する、付け足しあるいは余分な物という扱い）という教科があるというのは、想像するにも、かなりばかばかしいことです。

こんなことを現実に信じている人たちは、また、「英語」を学んでも、実際の英語を実用的に使いこなしたり、効果的にマスターすることなどできるようにならないと信じてもいます。そうした人たちは、そこまでのレベル（英語で会話ができる、ニュース番組を聞き取れる、など）に達するためには、改めて「英会話」を勉強しなければダメだと信じ込んでいるわけです。

彼らは、何年も何年もかけて、「英会話」を探し求めることもしばしばですが、残念ながら、それが見つかる保証はまった

くありません。結局、彼らは英語を使って何か役に立つことができる段階まで到達することは決してないでしょう。

しかし一方で、これとは逆のタイプの人たちがいます。この人たちは、「英会話」などと呼ばれるものは存在しないことに気づき、何年もかけて、ゆっくりと、しかし着実に英語力を伸ばしているのです。

このタイプの人たちは、例えば、英語のテキストに載っている話を家で声に出して読んだり、覚えただけの文法事項や単語のコロケーションをくわしい辞書でチェックしたり、さらに他にも、アウトプットを重視した作業を行うことにより、自分が一次的に身につけたことに、さらに上乘せしていったり、それを自分なりに応用していく作業を怠りません。

このような、言わば、「英語の勝ち組」の人たちは、「本当は英語でコミュニケーションができるようになりたいのに、運悪く“英会話”を習っていないから、それができない」などと言いついたり決してしません。

実際、私は長年英語を教えてきましたが、このような人たちから、「自分は英文法もリーディングやライティングも得意だ、しかし“英会話”はできない」（つまり、学んだ年数にふさわしいレベルで、ネイティブスピーカーとコミュニケーションができない）などという声は、未だかつて聞いたことがありません。

当然、学習者個々人のスキルにレベル差はありますが、「英文法を知っている」「英語を知っている」が、「英会話は苦手だ」という人は本当にきわめて少ないのです。前章の最後で述べた、ふつうのやり方で英語に取り組めば、「英文法を知っている」＝「英会話ができる」——これが正常な状態だと思います。